運動実践における言語の役割とその限界¹

滝 沢 文 雄 (千葉大学)²

Abstract

The purpose of this research is to clarify the use of language and its limitation required for movement practice by considering on the relationship between both of them. Especially in the scene of movement acquisition, there always exists some concern with the decrease of useless linguistic explanation and increase of efficiency in the movement practice. Therefore, research is needed towards the solution of this subject. It will be also inquiring for the possibility and limitation of linguistic thinking in movement practice.

First, it is considered how the language has been used in PE class. Then, the use of language in movement practice is considered. It is also considered on the relationship between movement practice and indication of the specific performance. Although it is natural to use language in movement practice, too much reliance on the language may cause some negative effects. Hence, it is important for us to be aware of the use of language so that one can complete the effective acquisition of movement. That is to say, on which level of practice and that of language we may use with words.

To conclude, although language with abstraction can explain movements rationally, it is extremely difficult to produce “actcept” which means Gestalt of movement perception. Therefore, we should change our attention from the use of language for scientific explanation to the usage which draws out of practice. Furthermore, the language should have a nature of time. Hence, there are two essential points of the use of language in movement practice. One of the usages is to make the selection of words indicating “actcept”, and to articulate “actcept” required in the practice is the other. For its completion, it is necessary to discern the limitation of linguistic thinking in movement practice, to assure the logic of bodily thinking required for movement acquisition and movement practice, and to consider the role of language in the scene of movement acquisition.

Key words: use of language, words, movement, practice, physical education

キーワード：言語使用, 言葉, 運動, 実践, 体育

¹ Function and Limitation of the Language in Movement Practice

² Fumio TAKIZAWA, Faculty of Education, Chiba University, 1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba 263-8522

1. はじめに

本研究の目的は、運動実践と言語使用との関連を考察することによって、運動実践における言語の限界および有効な言語使用を明示することである。この場合の運動実践には運動の習得も含まれている。

言語が実践においても重要な働きをしている、ということは誰でも認めるであろう。しかし、言語に不信感を持つ指導者も少なくない。このことは、言語に頼る指導が限界を持つ、ということを示していると考えられる。では、どのような場合に言語が重要になるのだろうか、また、どのような場合に限界を持つのだろうか。運動を効率的に習得し実践するためには、言語の役割と限界を明確にする研究が必要となるであろう。それは運動実践における言語的思考の可能性と限界について研究することでもある。

1995年に滝沢は既に「身体の論理」の中で次のように論じている。「客観的な動作の技術的説明も、下位〔動作〕に翻訳することができれば有効になり得る。そればかりでなく、ことばによって、みずからの下位〔動作〕をとりまとめることも可能である。」(25, p.209)。

このことについて彼はわずかな補足説明しか与えていない。よって、本研究はこの主張を、言語そのものの働きから再検討したい。

2. 実践における言語使用の問題点

運動の指導場面における言語使用について、現状の検討から始めたい。学校で体育の授業を見学させてもらおうと、話し合いの時間を設ける先生が多いことが分かるであろう。国語の授業だけでなく、多くの教科は言葉^{注1)}によって進められている。体育の授業も同様であり、運動課題を言葉にし、作戦を話し合い、仲間のできない点を指摘し、言葉で教え合う。良かったことを報告し、反省を言葉にさせている。もちろ

ん言葉で記録させもしている。すなわち、他の教科と同様な枠組みで授業を展開していると言えよう。しかし、体育の場合は運動実践が主要部分を占めるはずである。その話し合い・教え合いは実践に結び付かねばならないが、そうなるとはいえないようである。

先生は運動を客観的な言葉によって捉え指導する。子ども達もまた運動を客観的・科学的に説明しなければならないようである。他教科との違いは、運動という教材の違いでしかない。しかし、言葉にすれば課題は実現できるのだろうか。運動は言葉で行うわけではない^{注2)}。そもそも、子ども達は運動を読み取ることができるのだろうか。目標としての理想像を提示することは容易であるし、できないことを指摘することもまた容易である。しかし、できないことを指摘されても、なぜできないのかが自分の感覚として分かなければ、できるようにはならない^{注3)}。教師は言葉による目標を提示し、子ども達はそれを言葉で理解しようとする。子ども同士の教え合いもまた、言葉に頼るのである^{注4)}。

ここでは、説明することや指摘することと、具体的な実践とはどのような関係をもっているのか、について再検討したい。言葉によっては運動習得が制限されることがある。例えば、跳び箱の突き手である。跳び箱には手で突き放す動作が必要である。跳び越すという課題を解決するために、どうしても跳べない子どもに対しては、突き放し動作ではなく、腕支持による体重移動を教えることがある。跳び箱運動の学習で重要となる突き放しの動作がなくとも、開脚跳び越しの場合は跳び越すことができるからである。ただし、突き放し動作は習得できない。この場合、子どもにも対して「体重移動」という言葉を使う。その言葉によって跳び箱を跳び越すという課題を解決した子どもは、体重移動が大切だと仲間にも伝えるであろう。結局跳び越すことができても、突き放し動作は習得されない。それだけではない。体重移動とはいった

い何を意味しているのだろうか。歩くことも走ることでも体重移動である。この場合、腕支持によって重心を移動させる技術を身に付けたのである。この体重移動と同様の言葉に「逆さ感覚」がある。体育の授業ではその感覚に慣れることを重視する。開脚して股間から逆さに見る世界は、初めての場合、誰にでも驚きが生ずるであろう。われわれは何度かそれを繰り返すと、その世界に慣れるのである。しかし、逆さになることに慣れてしまえば、それで良いのだろうか。そもそも逆さ感覚とは何なのだろうか。

突き手の話に戻せば、「突き放す」という動作を有効に生じさせるには、重心をコントロールする腕支持の〔動作〕^{注5)}が不可欠である。この〔動作〕ができることによって、突き放すという〔動作〕ができる。それは腕で跳ねる〔動作〕である。しかし、跳び箱を「叩く」動作と突き放す動作が同じであると考える先生も多い。その〔動作〕は支持から突きはなしの中間段階として捉えることも可能ではある。しかし、この場合「突き放す」という〔動作〕につながらない「叩く」という〔動作〕の方がより多く生ずるであろう。要するに、体重移動、叩く、突き放すという言葉で指示された子どもは、別々の〔動作〕を習得することになる。脚で言えば、歩く、踏みつける、走る動作の違いである。それは日常生活での体験が大きく左右する感覚内容である。遠くに飛ぶには走る〔動作〕以上に、脚で跳ねなければならない。この場合も重心のコントロールが重要になる。同じように、跳び箱での突き放しも、叩くのととは違って、重心を確保し跳ねなければならない。

しかしながら、「支える」、「突き放す」という動作が、どのようにすれば実現できるのかは簡単な問題ではない。言葉で説明し、突き放しの局面を図示して補足し、映像を見させても、子ども達は、どのようにすればそれを自分でできるのか、については分からない。理想像はつかんでいる。言葉でも分かったつもり

はなっているができないのである。

では、なぜ言葉に頼るのだろうか。言葉の教育は幼児期から始まっている。言葉で自分の気持ちを伝えることが重視され続ける。また、合理的な説明は科学的観察と同時に学校教育において学習し続けられている。それは子ども達が成長する上で、重要な課題であることは確かである^{注6)}。教員も言葉で分かり易く説明することが何より大切だと考えているようである。よって言葉で語りかけ、子ども同士の話し合いをさせるのではないだろうか。しかし、体育の授業においては、その話し合いが実践につながってはいない。

このような言語使用とは別に、運動中に独自の言語使用が生じている。このことについて検討を加えたい。運動実践は力動性、持続時間、方向、協調動作、タイミング等、多くの要因によって構成されている。しかし、それらの複雑な関係を言葉で伝えることは不可能である^{注7)}。したがって、分析的ではない言葉を使用しなければならなくなるであろう。しかも、実践に必要なとなる瞬間にその言葉を使わねばならない。説明しては必要な局面が過ぎ去ってしまうからである。よって、運動実践においては合図に近い言語使用が多くなる。タイミングであったり、方向であったり、また力加減であったりする。またその場合、概念的な言語でないことがほとんどのようである。ゲシュタルトとしての特有な感覚を統合して、それに言葉を貼り付けることもある。例えば、体操競技に「含む」、「抜く」、「当てる」という用語がある。たとえ多くの人がこの言葉を知っていても、鉄棒運動での車輪で「含んでから当てなさい」という指示を理解できるのは、選手に限られるであろう^{注8)}。このことは、運動の体験がその用語の使用に不可欠であるということである。さらに、ある運動集団でそのような言語使用が有効になるということは、それらの用語が運動を引き出す言葉にもなるということである

注9)．すなわち，語によって自らの体験を取りまとめることが可能になる，と言えよう．

3．運動実践における言語の役割

以上の検討をより進めるために，言語そのものの機能を確認したい．雑駁に言えば，言語とは何ものかを指し示す記号である．しかも指示語以外では，指し示されたものは具体的な物事ではない．すなわち，言葉そのものは抽象化された物事を指し示している^{注10)}．通常はそのような言葉によって，具体的な物事を指し示すことになる．したがって，指し示された具体物さえ，個を超えた抽象性を帯びざるを得ない．また，個々の言葉の意味はどのように言葉が使われるのかという文脈に依存して変容する．ラング（言語の文法）よりもパロール（言葉の使用）が意味を生み出すということである．これが後に述べるように，体育での言語使用の可能性につながると考えている．

言い換えれば，我々が言語を使用するためには，共通したラングを持たなければならない．さらに，その個々の言葉によって示された内容の，共通理解がなければ会話は成立しない^{注11)}．しかも，そのラングを含めたパロールは，人とのやり取りで習得される．言葉を覚えるということは，他者とのやり取りの中で，指示対象を同時に学ぶことだと言えよう^{注12)}．このようにして言葉の抽象度が高くなると，概念的な言語使用が可能となる．学校教育では，この概念的言語が尊重されている．そのことによって個々人の身体的な実感は，かえって言葉にすることが困難になる．もともと，ラングを支えるランガージュ（言語を生み出す能力）は，言葉だけに具体化されるわけではない^{注13)}．

運動実践において言語を使用するのであれば，言語による思考についても，その独自性に触れておく必要がある．日常生活において，我々は言語によって思考することがほとんどで

ある．その場合，当然言語の特性を背負い込むことになる．具体的な事例について考察する場合でも，抽象的にならざるを得ないということである．さらに，言語による思考は無時間性，つまり時間に縛られない，という特徴を持つ．運動を科学的に，すなわち誰にでも理解できるように説明するのは，この言語による思考なのである．ところが，運動を実践するためには，みずからの身体で動かねばならない．ある方向にある時点で，どれだけの力を入れて動くのかは，すべて自分の身体によって左右される．もともと，時間性が重要となる実践と，無時間的な言語とは異質であり整合し難い．要するに，運動を引き出す言語使用は，概念的な言葉で考えていては不可能であり，実践に伴う時間性を考慮する言語使用が必要となる^{注14)}．

言語の時間性についてさらに言えば，「時間」という用語には時間性が含まれない．しかし，動作を表す「走る」という言葉，特に動詞には時間性が含まれる可能性がある．これは時間性を担った言語の問題である．概念としての「走る」は，定義づけられたものとしての用語である．それは歩くことや這うこととの概念的区別を含んでいる．その一方で，時間性を含んだ言葉として使用することもまた可能である．その際，二重の時間性がそこにはあると言えよう．他者の運動として捉える場合と，みずからの動きとして捉えた場合である．後者が〔動作〕としての時間性であり，客観的に運動を観察する前者の時間性とは異質である．

以上の考察から，実践を可能にする言語使用には幾つかの階層性が推察できるであろう．紙数の関係上，詳細は別の機会に論じなければならないが，この階層性を概略すれば以下の通りである．1) まず，実践を理解するための言語使用がある．それは指導者が実践について，どのレベルで子ども達に理解させるのかに関わっている．すなわち，何のために動くのかについて，言語的に理解するレベルでの説明と，実践

的に意図するレベルでの説明，という違いがある．また，どのように動くのかを，客観的なレベルで説明するのか，感覚的で主観的なレベルで説明するのか，という違いである．²⁾ 次に，実践を理解するための言語使用がある．これは理解ではなく，漠然とではあるが，動きが感覚的に分かるようにさせるということである．³⁾ そして，みずからの実践を可能にする，気づきのための言語使用がある．これにも客観的なレベルで気づかせるのか，主観的なレベルで気づかせるのか，という区別が必要となる．さらに，⁴⁾〔動作〕そのものを指し示す用語によって，それぞれの実践を具体化する言語使用がある．

4．言語的思考と身体的思考との差異

この階層性に関連している事柄として，意図と実践との関係も探らねばならないであろう．これは意志が強い・弱い，という問題ではなく，実践者は，意図を言語的に構成するのではなく，具体的な実践が生ずる意図を持たねばならない，ということである^{注15)}．この場合，言語で考えること，意図を持つこと，実践的意図（具体化可能な意図）を持つことの区別が必要になる．

これを明らかにするためにも，言語的思考と身体的思考との差異を明示したい．既に触れたように，言語的思考とは，言葉による客観的思考を目指している．それは，定義（概念規定）された用語の使用であり，合理的・整合的思考である．科学的思考に代表されるように，それは客観的時空間を思考の枠組みとしている．身体的思考とは，〔動作〕による主観的思考である．しかし，それは独断的思考ではない．みずからの知覚内容によるゲシュタルト（＝〔動作〕）は個人的であるが，実践的思考の論理として客観性を持つ可能性を持っている．この思考は，みずからが物や人との関わりを具体的

し，実践するための思考である^{注16)}．

この二つの思考に関わって，言語をどちらの側に立って聞き・話すのか，ということが実践にとっては重要となる．すなわち，同じ「走る」という言葉を聞いて，一般論としての走るという運動を考えるのか，〔動作〕としての〔走る〕を感じるのか，では異なった思考をしていることになる．この差異に目を向けることによって，指導者の言語的指示が有効になるであろう．すなわち，実践者がその言葉を実践とどのように結び付けるのか，によってその意味と有効性が変化するからである^{注17)}．さらにここでは，実践と身体的思考と言語との関係性を問わなければならない．実践場面では，「どのような言語を選択するのか」という用語の問題と，「どのように言語を使用するのか」という方法の問題が同時に生じているからである^{注18)}．

例えば，〔動作〕を指し示す言葉でいえば，「押す」「突っ張る」「蹴る」「持ち上げる」などがある．また，〔動作〕を分節させるための言語としては，「ぎゅっと」や「ぐいっと」「踏みつぶすように」があり，似た〔動作〕を提示する「ズボンをはくように」などがある．その際，時間性を担う言語使用が，実践には不可欠となる．既に述べたように，言語はもともと無時間的であるが，実践には時間的要素が不可欠である．よって実践を前提にした場合，時間性を持たない言語によっても，できる限り時間性を帯びるように言葉を使用しなければならない．例えば，「ためる」「踏ん張り続ける」「待つ」という言葉を挙げることができるであろう．

要するに，我々は実践を前提とする場合，言語使用の目的を，科学的説明のための使用から，実践を引き出すための使用へと，意識的に変えていかなければならない．科学的説明は，〔動作〕によって生じた現れとしての動作について説明している．逆に言えば，その科学的に説明された動作を生み出すために〔動作〕が必

要になる。その〔動作〕を引き出すために、言葉を使用するのである^{注19)}。

4. 運動習得における言語の限界とその可能性

より具体的な運動習得の場面において、欠点の指摘や実施の指示が、実践に際してどのような限界があるのか。本論文の始めに提示したこの問いについての答えは、これまでの考察から明らかであろう。外面的な指摘や客観的な説明は外に現れた結果についてのものである。その結果を糸口に、実践者みずからが運動を修正することはできる。しかし、それはとても困難な課題である。なぜなら、その結果を生み出している〔動作〕が意識できなければ、指摘された動作を修正できないからである。〔動作〕に関わる指摘については、客観的表現のために洗練された概念的言語では限界があると既に述べた。だからこそこで改めて、何のために何を指摘するのか、という問題を提示しなければならない。外に現れた動作を修正するためには、〔動作〕を修正しなければならない。よって、〔動作〕の修正に関連する指摘をしなければならない^{注20)}。その為に、運動についての説明と運動の実践との差異を明確にする必要があり、実践に必要な身体的思考が生ずるような言語使用を自覚する必要がある。

繰り返せば、客観的な説明は言語的に理解することであり、物事を対象化し客観的に観察した結果である。客観的であるためには、個々の具体例を捨象することが不可欠となる。それに対して、動くためには、みずからの身体能力によって外界との関係を築く必要がある。その関係の蓄積が運動能力である。したがって、個々人の具体的な身体能力が実践にとって不可欠であり、各自の〔動作〕は個人的なものとなる。つまり、運動実践に必要なことは、運動を外側から観察する視点ではなく、運動主体の視点か

ら現象を捉え、それを言葉にすることである。

要するに、運動を引き出し習得させる言語使用とは、その〔動作〕を分節し同定するために、手がかりを与えるような言葉を使用することである。よって、概念的・論理的である必要はないとさえ言えよう。既に保持している〔動作〕を確認させ、それを変容させて、新たな〔動作〕を分節させるように、言語を使用するのである。また、たとえ〔動作〕を指示する言葉があったとしても、その〔動作〕を保持していない人にとっては、意味のない言葉になってしまう、という現実も確認する必要がある。ただしその場合、その言葉は〔動作〕を取り纏めるための糸口として、重要な役割を果たす可能性がある。それもまた指導者の言語使用に依存すると言えよう。

5. おわりに

運動実践において言語を使用することは当然であるが、言葉に頼り過ぎると多くの弊害が生ずることになる。目的・意図と実践との関わりは、言語と実践との新たな分析を必要としている。運動の実践場面で有効な言葉を使用するためには、実践のどのレベルで言葉を使用するのか、どのレベルの言葉を使用するのか、また、どのようにそれらの言葉を使用するのか等を意識することが重要となる。

言い換えれば、運動の習得や実践において言語を使用する際に、次のことを確認することが不可欠になる。すなわち、実践における言語的思考の限界を見極め、実践に必要な身体的思考の論理に従って、運動実践を有効にするために言語はどのような役割を持ち得るのか、という確認である。同時に言語の限界を自覚しつつ、有効な言語の使用を探りつづけることもまた必要となろう。

要するに、運動を実践するための言語使用とは、〔動作〕を言葉に乗せることであり、その

言葉によって流動的な動作知覚を分節し同定することである。したがって、概念的に言葉を学習するだけでは、またその言葉をそのまま使用するのでは、運動の実践には直接つながらない。客観的な説明を実践者が自分の〔動作〕へと翻訳できるかどうかが重要となる。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(2)，H，20-22），課題番号20500513「運動実践における思考の独自性 - 身体運動の現象学的分析 -」の助成を受けている。

< 注釈 >

注1) 本考察において用いている「言葉」とは、日常的に話される個々の単語やその連なりを意味している。その言葉（word）を含め、意味を伝える記号の総体を「言語（language）」と表記している。

注2) アンリによれば、「われわれの諸行為は、われわれがひとつの手段としてのわれわれの身体に訴えることなく、遂行される」（7, p.86）。運動について言語的に考えることは、運動を遂行することではない。つまり、「運動についての思惟は、運動ではない。」（7, p.87）のである。また彼は、「われわれの知とわれわれの行為とのあいだに、ずれはない。なぜならわれわれの行為はそれ自身、その固有の本質において、ひとつの知だからである。」（7, p.294）と述べている。このことは、言語とは別の知があるということである。その実践においては、言語化の弊害さえ生ずるとトゥアンは主張している。すなわち、「意識した知識というものは、ある技能の習得をさまたげることすらある。」（26, p.109）

注3) ダメットは、「車のドライバーやカヌーの漕ぎ手」に必要となる思想の媒体は「言語ではない。」（1, p.187）と述べ、「これらの思想は、言語によって表現された思想が

持つような構造を持たない」（1, p.187）と主張している。同様にミリカンは、「ある性質を識別する能力は、それ自体としては、その性質の概念ではない。」（15, p.241）と述べ、「対象の知覚は、少なくともまず第一義的には、理論的な目的ではなく、実践的な目的に直接、役立てられる。」（15, p.245）と述べている。またラマチャンドランは、「知覚の完成と概念の完成とは、はっきり区別されなくてはならない。」（22, p.146）と主張している。言語と概念は同一ではないが、本考察における上記引用の場合には、概念を言語と読み替えても差し支えないであろう。

注4) われわれは身体を客観的に物として観察することができる。運動実践においてもこの側面が言葉によって扱われることになる。リシールはその身体を「空間的な外部において客観化された身体、科学的観察と実験の対象としての身体」（23, p.41）として「物理的身体」（23, p.41）と呼んでいる。確かにこの身体的側面は言語化が容易であるが、みずからみずからの身体として実践するための言語化とは異なる。ガダマーも同様のことを次のように述べている。「われわれが身体（Leib）という語を使用するとき、われわれは決して拭いえない語感として、直接的に Life すなわち生命（Leben）を連想する。身体（Leib）と生命（Leben）は、われわれが測定できるものとは幾分異なったものである。それに対して肉体（Körper）は、言葉の広い意味において、われわれが客体化によって確定し、測定できるものと決して無関係ではない。」（4, p.174）。運動指導の際には、どの側面を言葉にしているのか、について自覚的でないといけない。

注5) 「〔動作〕」とは、運動主体が動作を生じ

させる際の「知覚のかたまり」を指し示す用語として、また「動作」とは、運動を外側から観察しその動きを指し示す用語として表記し、区別している。このことの詳細については、文献25第5章を参照されたい。

注6) メルロ=ポンティは話すことについて、「語る主体にとっては、表現することは意識にのぼらせることだ。主体は単に他人のために表現するのではなく、自分の志向しているものをみずから知るためにも表現するのである。」(14, p.142)と述べている。この意識化は運動の習得の際にも必要となるが、本論文で考察するように、言葉で表しても実践できるようになるわけではない。言葉と実践とのつながりを探り続けなければならない。

注7) 長滝はこのことに関連して、「一般的には言語をつうじて対象化されたものが知識とよばれる傾向にあるが、これにたいして、より身体的な水準で身につけられており、いわば知覚能力そのものに浸透している暗黙の知識もある。前者を言語知、後者を身体知と名づけてもいいだろう。」(17, p.68)と論じている。彼はこの身体知が言語化できない理由について、「あらゆる知覚や経験はそれだけで独立していることはなく、つねにほかの知覚や経験との関連性のうちにある。」(17, p.47)からだとも述べている。

注8) 「ことばが学習者の意識に現われる五官感覚や運動体験と常に結びついて用いられるときだけ、運動修正に役立つのである。現実となんら関係のない空虚な形式的なことばが使われるのでは何の役にも立ちはない。」(12, p.390)とマイネルは言語使用について述べている。オグデンとリチャーズに従えば、もともと、「言語的取引き、あるいは言語的伝達とは、話者が象徴したのとすべての適切な点で類似している指示行為を、聴者に行わしめるような象徴の使

用法である」(19, p.281)。このことは、なにものかを表現する際の言語の限界を示しているとも言えよう。また、日常言語学派のハヤカワは言語の多様な働きについて詳しい考察を展開しているので、文献6を参照されたい。

注9) これまでは主に言語の限界について述べてきたが、言語化の有効性についても論ずる必要があろう。言語の働きについてランガーは、「シンボルによって対象をつかまえるというこの現象は基本的であるので、言語はその基礎の上に発達したのである。語は経験の中にあるなにものかを固定し、そしてそれを記憶の中核、つまり利用する表象にする。他の印象は表示された事物のまわりにおのずから群れをなして集まり、その事物の名前が呼ばれるとき、連想的に思い起こされる。」(10, p.160)と論じている。また野家は、「言語習得とは『認識』に属する事柄ではなく、『実践』に属する事柄なのである。すなわちそれは、世界との新たな『関わり方』を学ぶこと、あるいは新たな『分節様式』を獲得することだと言ってよい。」(18, p.201)と述べている。

注10) エディーは「語によって、人間は『不在なもの』を操作することができる。人間が、その体験的実存の世界から距離をとり、経験の混沌とした流動のなかにさまざまな要素を区別し、そのようにしておのれ自身を、みずからの経験対象を超えるものとして経験するのは、まさに言語の使用によるわけである。」(3, p.235)と論じている。

注11) ダメットによれば、「二人の話し手がコミュニケーションに成功しうするためには、両者は、[1] 単に、与えられた名ないし他の[単称]名辞を、同一の対象を指示するものとして使用せねばならないだけでなく、[2] さらに、お互いがまさにそのよう

に使用しているということを知りうるでなければならない。しかるにこの後者が可能となるのは、唯一、両者が当の名ないし名辞に同一の意義を結びつけている場合のみである。」(1, p.53)。日常の会話でも難しさを伴うコミュニケーションは、実践においてはさらに困難となる。なぜなら指示対象自体が変容するからである。フォルマーが述べるように、「ゲシュタルト知覚は知覚されるゲシュタルトに関する情報と訓練によって影響されうる。」(27, p.91)のである。

注12) メルロ＝ポンティは次のように述べている。「言語活動に先行して対人関係がとり結ばれ、その文脈の中で言語活動が現れてくるのです。」(13, p.15)。滝浦も「言葉において意味が問われる限り、問題なのは、それが何を指すかではなく、どう使われるかでなければならない。」(24, p.125)と述べている。さらに語についてメルロ＝ポンティは、「語は、言語の制度全体を介してはじめて意味を持つのです。」(13, p.96-97)と述べ、語が単独で成立することはないと主張している。語が記号の一種だと捉えれば、コーエの次の主張も、同様の事柄を示していると言えよう。「記号それ自体などというものは存在せず、記号と呼ばれるものの多くはテキストである。記号とテキストは、多くのさまざまな形で絡み合った記号生産の様式が参与して相関関係を成立させる労働の結果である。」(3, p.180)。

注13) 大堀は認知言語学の立場から、「カテゴリ化やスキーマ化をはじめ、言語に関わる能力の多くの部分は他の認知能力と結びついていると考えられる。」(20, p.146)と述べている。言語による思考だけが認知能力なのではない。

注14) リベットは、無意識的活動について興味深

い実験結果を報告している。すなわち、「タイム - オン理論」として「意識を伴う感覚経験(つまり、アウェアネスを伴う意識的な感覚経験)を生み出すには、(その感覚事象が閾値に近い場合)適切な脳活動が最低でも約500ミリ秒間持続していなければなりません。」(11, p.118)と実験結果から述べている。彼によれば、「無意識の思考は、適切な脳の活動が十分な長さの時間継続をしたときにだけ意識的なアウェアネスに到達する」(11, p.125)のであって、「感覚信号に対する迅速な行動、すなわち運動反射は、すべて無意識に行われ」(11, p.127)、かつ「感覚信号への速い反応は無意識に発達」(11, p.236)する。われわれは意識する前に実践することが可能だと言えよう。このことについても言語使用の際には考慮する必要がある。

注15) このことに関して、村田は次のように論じている。「道具や道具の使用の仕方を対象的に知覚し意識することが少なければ少ないほどわれわれはうまく道具を使用できるようになる。しかしこのことは熟練した行為が何物にも導かれない無意識的・自動的運動になることを意味するものではない。熟練した行為とは、何かの確なものを知覚し意識することによって行為が導かれるようになることを意味するのである。」(16, p.158)このことは、運動実践についても言えよう。何かを意図しなければ、運動を生じさせることはできない。「何事かを意図するということには、意図された事象を自ら実現することができる意識が含まれており、それゆえまた、どのように実現しうるかという行為の仕方に関する知識が含まれているのである。」(16, p.180)。このことは身体運動を言語化しうることを意味するが、この行為が可能となる事柄すべてを言語化することはできない。

注16) ピアジェは言語と思考との関係について、次のように論じている。「言語は、思考を説明するには、不十分なのだ。というのも、思考を特徴づけている構造は、言語的事実よりもいっそう深い活動と感覚運動的メカニズムの中に、その根をのばしているからだ。」(21, p.127)。もともと、われわれが意識する前に身体レベルで様々な事柄が生じている。それを市川は次のように論じている。「<見分け>は、身が主體的、または非主體的に世界を身で分節化することを意味するとともに、身が世界を介して潜在的に分節化されることを意味する。」(8, p.58)。われわれは見分けすることによって実践を可能にする。さらに、実践を通して外界と主体は、相互的に変容し続けている。市川の「身」という概念は身体以上の意味を含んでいるが、身体が運動実践を担い、身体自身が変容し続けているのは確かである。身体的思考については、文献25第7章を参照されたい。

注17) 客観的に自らの身体運動を見る場合、科学的枠組みで観察しがちであるが、みずからが運動するために身体を相対化することもある。「身の脱中心化は、無中心化ではないから、自己中心化がなくなるわけではない。脱中心化は自己中心化を脱することであり、いってみれば自己中心化の相対化にほかならない。」(8, p.263-264)。このことが身体運動を伝達可能にさせると言えよう。

注18) Gerdner, H.が「複合的知性 - 実践における理論 -」において、言語的知性、論理・数学的知性、空間的知性、音楽的知性、身体・運動的知性、对人的知性、個人内的知性を区別し考察している。文献5を参照されたい。ここから言えることは、言語的知性と身体・運動的知性とは異なった論理を持っている故に橋渡しをする必要がある、ということである。

注19) 「普通、われわれは言語を使用しながら、使っている語ではなく、それらの語が準提示している意味に注意を向ける。(中略)。自然の状態では、意味の多様なレベルに生きているのであって、われわれが語そのものに注意の焦点を定めるのは、特別な努力の結果でしかないのである。語は、意味の運搬者にすぎない。」(3, p.239)とエディーは述べている。

注20) ヤニツヒによれば、「素朴な略式定義や代替定義から、抽象手続きにいたるすべてのタイプの定義は、結局のところただ言語使用の慣習にかかわっており、それ以上のものではないのである。それらの定義は、言語使用の規則に限定されており、再度言語的対象との関係だけで論じられている。これに対して実現手続きの記述やとりわけ手続きの指示は、制作行為との関連で、言語とは独立の基礎をもつ。」(9, p.64.)。さらに彼は、「行為の遂行そのものだけが、行為が可能であるか否かを、最終的に決定するのである。また行為を実際に遂行することによってのみ、行為者においてノウハウが生み出されうるのであって、たとえば遂行の可能性についてのなんらかの理論的な証明によって、生み出されるのではない。」(9, p.212.)と述べている。

<引用・参考文献>

- 1) ダメット (Dummett), M.: 野村和幸他訳 (1998) 分析哲学の起源 - 言語への転回 - . 勁草書房: 東京.
- 2) エーコ (Eco), U.: 池上嘉彦訳 (1980) 記号論 II . 岩波現代叢書: 東京.
- 3) エディ (Edie), J.M.: 滝浦静男訳 (1980) ことばと意味 - 言語の現象学 - . 岩波現代叢書: 東京.
- 4) ガダマー (Gadamer), H-G . : 三浦國泰

- 訳 (2006), 健康の神秘 人間存在の根源現象としての解釈学的考察. 法政大学出版局: 東京.
- 5) Gardner, H. (1993): Multiple Intelligences. BasicBooks: New York.
- 6) ハヤカワ (Hayakawa) S.L.: 大久保忠利訳 (1965) 思考と行動における言語. 岩波書店: 東京.
- 7) アンリ (Henry), M.: 中敬夫訳 (2000) 身体哲学と現象学 - ビラン存在論についての試論 -. 法政大学出版局 (叢書・ユニベルシタス): 東京
- 8) 市川 浩: 中村雄二郎編 (2001) 身体論集成. 岩波書店 (岩波現代文庫): 東京
- 9) ヤニツヒ (Janich), P.: 川本英夫・直江清隆訳 (2004) 制作行為と認識の限界 行為としての自然科学, 国文社: 東京
- 10) ランガー (Langer), S.K.: 矢野萬里他訳 (1960) シンボルの哲学. 岩波現代叢書: 東京.
- 11) リベット (Libet), B.: 下条信輔訳 (2005) マインド・タイム - 脳と意識の時間 -. 岩波書店: 東京.
- 12) マイネル (Meinel), K.: 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店: 東京.
- 13) メルロ=ポンティ (Merleau-Ponty), M.: 木田元・鯨岡峻訳 (1993) 意識と言語の獲得. みすず書房: 東京.
- 14) メルロ=ポンティ (Merleau-Ponty), M.: 竹内芳郎訳「言語の現象学について」, 竹内芳郎監訳 (1969) シーニュ 1. みすず書房: 東京.
- 15) ミリカン (Millikan), R.G.: 信原幸弘訳 (2007) 意味と目的の世界 - 生物学の哲学から -. 勁草書房: 東京.
- 16) 村田純一 (1995) 知覚と生活世界 - 知の現象学的理論 -. 東京大学出版会: 東京.
- 17) 長滝祥司 (1999) 知覚とことば - 現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い. ナカニシヤ出版: 京都.
- 18) 野家啓一 (1993) 言語行為の現象学. 勁草書房: 東京.
- 19) オグデン (Ogden), C.K. & リチャーズ (Richards), I.A.: 石橋光太郎訳 (1967) 意味の意味, 新泉社: 東京.
- 20) 大島壽夫 (2002) 認知言語学. 東京大学出版会: 東京.
- 21) ピアジェ (Piaget), J.: 滝沢武久訳 (1968) 思考の心理学. みすず書房: 東京.
- 22) ラマチャンドラン (Ramachandran), V.S., ブレイクスリー (Blakeslee), S.: 山下篤子訳 (1999) 脳のなかの幽霊. 角川書店: 東京.
- 23) リシール (Richir), M.: 和田渡他訳 (2001) 身体 - 内面性についての試論 -. ナカニシヤ出版: 京都.
- 24) 滝浦静男 (1978) 言語と身体. 岩波現代叢書: 東京.
- 25) 瀧澤文雄 (1995) 身体論. 不昧堂出版: 東京.
- 26) トゥアン (Tuan), Y.: 山本浩訳 (1988) 空間の経験. 筑摩書房: 東京.
- 27) フォルマー (Vollmer), G.: 入江重吉訳 (1995) 認識の進化論. 新思案社: 東京.

受付 2009年4月14日

受理 2009年5月18日